

# 平成22年度企画事業 おおずふれあいスクール

自然・社会・文化・スポーツ等の様々な体験活動や交流を通して、いくつもの出会いや挑戦、発見や感動がありました。その中で自分の進むべき道を選び、今年もたくさんの方々がこのスクールを旅立っていきました。

## 1. 事業実施までの経緯

「おおずふれあいスクール」は開設以来、14年を経て、15年目の節目の年を迎えた。その間に、多くの不登校で悩む子どもたちの心に寄り添い、その心の居場所を提供すると共に、子どもたちの自立を支援し、その進路決定の援助をしてきた。さらに、平成13年からは、対象者の枠を広げ、青年の社会的自立を支援する取組を進めてきた。

国立青少年教育振興機構では、昨年度末「機構活性化プラン」を策定し、今年度より「課題を抱える子どもを対象としたプログラム開発事業」を本格的に開始している。開発事業の対象は、不登校、ひきこもり、ニート、特別支援、非行の子どもたちとなっており、国立大洲青少年交流の家としても、不登校の領域でこの事業に参画している。

現在、不登校児童・生徒及びひきこもりがちな青年は、大洲市や大洲市近隣にも多く、「おおずふれあいスクール」はなくてはならない存在となっている。大洲市教育委員会や県内の教育センター（適応指導教室）と綿密な連携・協力を図りながら、地域のニーズに基づく、施設の特徴を生かしたプログラムを開発・実践することを目指している。

## 2. ねらい

不登校生徒及びひきこもりがちな青少年に、居場所を提供し、国立大洲青少年交流の家のフィールド、人材、設備などを活用しての自然体験活動や社会体験活動をとおして、自立を促し社会への適応能力の向上を図る。

3. 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
4. 共 催 大洲市教育委員会
5. 後 援 愛媛県教育委員会
6. 期 日 平成22年4月1日（木）～平成23年3月31日（木）
7. 場 所 国立大洲青少年交流の家及び近隣施設
8. 募集人員 心理的・情緒的理由による不登校児童・生徒及びひきこもりがちな青年（22歳程度まで）15名程度
9. 支 援 者 大洲市教育委員会職員2名、国立大洲青少年交流の家職員3名

## 10. 日 程

月～木曜日とし、金曜日は学校チャレンジデーとする。休日は学校に準じる。

< 日 課 表 >

	9:00	10:00	12:00	13:30	15:30
月・火・水	スタッフ	自主活動	昼食	集団活動	
木	ミーティング	(学習)		専門委員との活動	

- ・ 上記日課表を基準としているが、行事等で柔軟に活動を展開できるようにしている。
- ・ 集団活動は他人との接し方、人間関係づくりを重視し、多様な活動を展開する。
- ・ 金曜日の学校チャレンジデーは、可能ならば学校への登校を促す。
- ・ 火曜日の午後(年16回)、英語指導助手の指導により英語学習を実施する。

## 11. 支援体制

- 運営委員会、専門委員会を組織し、活動支援を行う。  
大洲市教育委員会教育長、市内中学校・高等学校長、小学校養護教諭、愛媛県教育委員会、臨床心理士、八幡浜保健所、愛媛県若年者就職支援センター、大洲市青年会議所、青少年交流の家所長、主任企画指導専門職、計11名で運営委員会を構成した。  
また、14名の大洲市内小・中・高等学校教員、スクールカウンセラーによって専門委員会を組織し、4名グループに分かれ、月に2回程度スクール生の活動を直接支援した。
- 「親の会夜のつどい、思春期親の会」で保護者同士の連携を図る。
- 関連事業として、専門家による講演会や研修会を開催する。

## 12. 活動内容

地域との連携や本所の人的・物的資源の特長を活かし、社会参加を進めている。中でも職場体験活動やボランティア活動への積極的な関わりを重視している。活動プログラムについては、時間設定などの大枠だけをつくり、具体的な活動は青少年の意欲・意思を最大限尊重し、のびのびと活動し居場所が実感できるよう配慮している。また、多くの活動を企画し、興味と関心に応じて自らが選択できるようにしている。

以下7つの活動で支援している。

- |          |          |          |            |
|----------|----------|----------|------------|
| ① 自主活動   | ② 生活体験活動 | ③ 自然体験活動 | ④ ボランティア活動 |
| ⑤ 職場体験活動 | ⑥ 文化活動   | ⑦ スポーツ活動 |            |

### 【主な活動の様子】

#### 「農園作業と収穫感謝祭」

なるなる畑に苗を植える準備



野外炊飯場での収穫祭



秋の収穫感謝祭



年間を通して、大洲市の体験農園を利用して野菜づくりを行った。種まきからはじまり、定期的な除草や手入れをしながら心を込めて栽培した。春の収穫祭では野外炊飯場を活用し、

スクール生全員で協力しながらカレーパーティーを開催した。秋にはスクールの調理室で、山菜やサツマイモを使った炊き込みご飯や豚汁、スイートポテトづくりに挑戦し、秋の味覚をおいしくいただいた。野菜の収穫の感動と植物を育てる大変さを感じた農園作業であった。

#### 「交流の家のプログラムを活用した体験活動」

今年度は、青少年交流の家の活動プログラムを積極的に取り入れて体験していった。カヌーやシーカヤック、クライミングウォールはかなりの恐怖心を伴うスポーツで、初めは躊躇する者も多かったが、自分自身の壁を乗り越え、友達同士で励ましあいながら全員が挑戦できた。

「何事にも挑戦することで新しい世界が開ける」という感覚を実体験としてもつことができた。



明浜でのシーカヤック



ウォークラリーへ出発



クライミングウォールに挑戦

#### 「青少年交流の家フェスティバルへの出店」〔平成22年10月23日〕

毎年、秋の青少年交流の家フェスティバルでは、おおずふれあいスクールのブースを設置し、ボランティア活動として子どもたちに折り紙クラフトの指導を行っている。今年は、折り紙クラフトだけでなく、自主活動の時間にこつこつ作っていた昆虫をかたどったしおりや髪留めを販売した。その収益で卒業を控えた仲間たちとのお楽しみ会を自主運営で開催したり、東北関東大震災の義援金として寄付したりするなど、大変有意義な活動へ発展していった。



バザー会場の準備



紙クラフトを指導



手作りの小物を販売

#### 「いきいき野外体験 in 淡路」〔平成22年11月17日～19日〕

今年のいきいき野外体験は淡路青少年交流の家を拠点に、徳島・淡路島・神戸で実施した。阿波踊り会館で他の観光客と阿波踊りで交流したり、神戸南京町や須磨海浜水族園を散策したり、淡路島牧場でチーズ作りに挑戦したりと、そこでしか味わうことができない様々な体験活動に取り組むことで、幅広く見識を広げることができた。2泊3日間の活動の中で「阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター」の見学と淡路青少年交流の家で実施した「キャンドルのつどい」が大変印象的だった。参加したスクール生は、あらためて命の大切さと、仲間と協力して一つのものを作り上げる達成感を味わうことができた。また、集団で規律を守り宿泊する経験も自立への力となっている。帰りには屋島を見学し、名物のさぬきうどんに舌鼓を打った。



阿波踊り体験



キャンドルのつどい in 淡路



淡路島牧場でのチーズ作り

### 「自己発見ワークショップ」

ジョブカフェ愛ワークの大内由美氏と熊谷環氏を講師に招いて、自己発見ワークショップを3回実施した。第1回目は、「自分のことについて考える機会を持つ」「友達のよいところについて、考えて伝える機会を持つ」というテーマで活動を行った。ベアーズカードを使った自己紹介で自分の素直な気持ちを引き出せるようになり、自己肯定感が高まり、自己理解が進んだ。

2回目は、おおずふれあいクルールの運営委員でもある古森氏の協力を得て、大洲市青年会議所より3人のゲストが参加した。自分の仕事について「その仕事に就くまでの道のり」「その仕事のやりがい」について直接、生の体験談を聞くことができた。地元の先輩であり、実社会で働く方の実体験に触れる機会をもつことで、将来の仕事に対する意識の高まりが感じられた。

3回目は、「あるテーマにかかわりのある仕事を考える」というワークに挑戦した。テーマは参加した男子生徒がアレンジし「アニメイベントを開催するまでの仕事」に決まった。様々な仕事カードを仕分けしながら、世の中の仕事の多様さやつながりを体感することができた。



ベアーズカードで自己紹介



自分の仕事を紹介するゲスト



イベント会社の仕事を考える

## 12. 参加者の声

参加者の事後アンケート結果を以下に示す。

※ 満足：80.0%    ※ やや満足：20.0%    ※ やや不満：0.0%    ※ 不満：0.0%

- みんなに出会えてよかったし、1人じゃないと思えるようになった。
- 自分勝手な行動をとってしまった。
- さまざまな人と交流ができた。大変なことも多かったけどみんなでいると楽しかった。
- 学習をする習慣がついて、勉強が良くわかるようになった。
- もう少し体を動かしたかった。スポーツがしたかった。
- 性格が明るくなった。不登校になってみんなと出会えて、逆に成長できた。
- いつの間にか学校に行けるようになっていた。
- 学校へ行けるようになった。友達とはどのようなものかが知れた。
- みんなとのふれあいが自分自身のためになった。卒業してさみしいです。
- 人見知りがなくなった。心が温かくなった。

### 13. 成果と課題

今年度は、スクールの運営責任をより明確にする観点から、これまでの実行委員会を運営委員会という名称にするとともに、地元高等学校の校長や大洲市青年会議所から委員として参画してもらうことで、運営体制をより充実させてスタートした。特に、今年度は、みかん農家で2泊3日の職業体験を行う「ふれあいワークキャンプ」が、文部科学省の委託事業「子ども・若者育成のための体験活動推進事業」に指定され、四国中央市にある適応指導教室に通う生徒の参加を得て実施することができ、充実した職業体験、交流体験となったほか、「青少年体験活動フォーラムin大洲」や教育相談に関する研修会でもその活動を発表し、成果を発信することができた。

また、スクール生が職場で働く方の実体験を直接聞く機会を得ることもでき、運営委員・専門委員の方々からも、「いろいろな体験活動を通して、スクール生が自己表現し社会性を身に付けている」などの意見が寄せられている。今後とも、こうした取り組みを生かしながら、プログラムの更なる充実と成果の発信に努めていきたい。

おおずふれあいスクールは不登校生徒・青年の心の居場所として定着しており、スクール生は、ふれあいルームや野外の活動で大変元気な姿を見せた。今年度は中学3年生が5名在籍しており高校進学に向けての学習にも力を入れた。学校に再登校できるようになった生徒が2名、金曜日のチャレンジデーや学校行事、その他の日でも学校に足が向くようになった生徒もおり、全員が希望する県立高校に合格することができた。

青年のスクール生は、リーダーとしての成長だけでなく、就職に向けて運転免許を取得したり、アルバイトに挑戦したりするなど、具体的なステップアップが見られた。

スクール内外での人とのふれあいを通して、スクール生は人間的に大きく成長した。様々な体験活動を通して、前向きな姿勢やチャレンジ精神も身に付けたように思える。

親の会は、子どもの現状や将来についての不安を本音で語り合い、情報を共有・相談できる場として、毎回10人程度が参加し有意義な時間となっている。これからも継続が望まれる。

登録生13名（常時5～6名が通所）は中学生から青年までと年齢幅が広い。先輩が前に出たり、一歩下がって全体を見たりと良い面もあるが、受験生への進学支援と就労支援の両面には対応しきれない部分があった。スタッフの指導・支援体制を今後検討する必要がある。

#### 資料I 『実行委員・専門委員アンケート集計』 一部抜粋

【運営・専門委員15名より回答（設問により未回答あり）】（専）…専門委員会 （運）…運営委員会

#### ① この事業のねらいは適切でしたか。

- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| 4 適切だった(15名)      | 3 どちらかという適切だった |
| 2 どちらかという適切ではなかった | 1 適切ではなかった     |

理由:(専) 性教育、喫煙防止・飲酒防止等、それぞれの班で工夫して活動できていたと思う。

不登校の居場所となっており、いろいろな体験活動を通して自己表現し、社会性を身につけていると思う。

(運) ワークキャンプでは、他の適応指導教室の参加もあり、適応指導教室同士の意義深い交流ができた。

#### ② ねらいに沿った適切な活動がなされていましたか。

(開催時期、時間設定、参加者のニーズ、所の特性を生かした内容等)

- |                     |                  |
|---------------------|------------------|
| 4 なされていた(15名)       | 3 どちらかというとなされていた |
| 2 どちらかというとなされていなかった | 1 なされていなかった      |

理由:(専) 班の先生方の特徴を生かした活動ができていた。

(運) 設定された活動の一つ一つに意義があり、大変有効であった。

- ③ 全行程を通して健康・安全面への配慮はなされていたと思いますか。  
（活動場所の施設・設備、参加者への健康・安全管理、スタッフの健康・安全管理等）

4 なされていた(14名) 3 どちらかというとなされていた  
2 どちらかというとなされていなかった 1 なされていなかった

理由:(専) ふれあいスクールの先生方に、その都度、子どもたちの様子を詳しく伝えてもらうことで配慮できた。

(運) 参加者の健康管理や人間関係づくりの上での細やかな気配りが十分なされ、当初の目的を達成するよい活動になった。

- ④ その他、何でも気づいたことをお書きください。

(専) 初めてふれあいスクールの専門委員となり、2回程、共に行事を行うことができ感謝している。1回目よりも2回目と、スクール生が親しく話しかけてきて、自分を受け入れてくれたようで、スクールの一員になれた気持ちがした。

ふれあいスクールの先生方には、大変お世話になった。数回しか参加していないが、とても温かい雰囲気、生徒も生き生きしていたように感じた。

小学校で人間関係につまずき、学級に入れず身を隠すように保健室登校していた生徒が、ふれあいスクールで生き生きと活動している。本人に居場所ができ、保護者も喜ばれている。本校の先生方も、本人の様子や表情が4月当初に比べ、とてもよくなってきたと言われ、成長を感じている。ふれあいスクールで様々な活動を通して社会性を身につけている結果と、スクールの先生方の日々のご指導の成果と感謝している。

専門委員の先生方がそれぞれの活動を工夫し、いろいろな活動ができた。

専門委員が活動に参加する際、各担当班ごとに派遣依頼文書がほしい。正式な文書の方が学校を出しやすい。なかなか学校を離れにくく、欠席が多くて迷惑をかけた。

- (運) 毎回、生徒へのきめ細やかな配慮がなされていて、(また、それが自然で)講師として勉強になった。

ふれあいスクールの生徒や職員の要望を実現可能な各種団体が、まだまだ存在すると思う。その調整機関として委員会は重要な役割をもっている。次年度以降も様々な意見を出し合い、全員で協力していきたいと思う。

今年度は、いろいろな立場の方々が参加し、とてもよかった。

資料Ⅱ 『平成22年度おおよそふれあいスクール生の受入及び復帰状況』

	小学生	中1	中2	中3	高1	高2	高3	青年	総計
登録者数	0	1	4	5	1	0	0	2	13
復帰	0	0	0	2	0	0	0	0	2
ほぼ復帰	0	0	0	1	0	0	0	0	1
小計	0	0	0	3	0	0	0	0	3
毎日通所	0	1	1	2	1	0	0	1	6
通所なし	0	0	3	0	0	0	0	1	4
小計	0	1	4	2	1	0	0	2	10
総計	0	1	4	5	1	0	0	2	13

※SSWの3名は、スクールソーシャルワーカーと行事のみ参加 ※計画通所は日を決めて月に2～3回通所